ＳＭＣ金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain　SMC 豊島 健治

ＩＢＪ消ゆ
（１０年遅れの風景）

４月１日、日本興業銀行（インダストリアル・バンク・オブ・ジャパン＝ＩＢＪ）がみずほ銀行となってその名を消した。勿論、富士銀、第一勧銀にしても同じくその名が消えたわけであるが、かつて、「産業金融の雄」としてその名を欲しいままにしたＩＢＪが姿を消したことは、〈高度成長日本〉が名実ともに終焉を迎えたことを象徴しているようである種の感慨を覚える。

かつて、ＩＢＪ行員は誇り高き行員だった。自分達が日本の金融をリードしているとの自信に満ち溢れていた。有名大学の優秀な学生が集っていたから自信に溢れていたのではなく、ＩＢＪが日本の高度成長を金融の基幹的部分でリードしていたことがそのエリート意識を更に高揚させたものと思うが、私が籍を置いていた地銀などは、彼らにすれば「指導してあげる」力量のない存在に過ぎなかった。

ＩＢＪの主催する研修は地銀の人間には及びもつかない「高級なこと」がテーマとなって、参加できる人数も制限されて人気ある研修だった。又、ＩＢＪは「三木会」（毎月第三木曜日に開催する会）等といった名称で地銀幹部を集め、現在の経済金融情勢などを逐一解説して地銀マンの信頼を克ちとっていた。そしてその高い給与水準と相俟って、ＩＢＪ行員は地銀の人間にとって「高級銀行員」そのものだったのである。

そのＩＢＪが４月１日消えた。２００２年４月１日は、その意味で多くの金融マンにとって記憶に残る日となるかもしれない。しかし、言葉の真の意味でＩＢＪがその存在価値を疑われたのは、今から１０年以上も前のことであった。それ以降もＩＢＪは外面的には誇り高きバンカー集団だったが、既に日本経済にとって必要不可欠な銀行ではなくなっていた。だからこそ都銀と糾合してみずほ銀行に相乗りしたのである。

１９９１年８月、大阪ミナミの料亭「恵川」の女将尾上縫に対してＩＢＪが（グループも含め）２，０００億円以上の巨額融資を行っていたことが発覚した。そしてそれは単に一支店の独走ではなく、尾上縫のご機嫌伺いに何と頭取まで足を運ぶというＩＢＪ全体の行動だった。この出来事は、他の金融機関も巻き込んでいたのでＴＶマスコミに格好の話題を提供し、尾上縫という人物の特異性とそれに群がった腐食金融機関という構図で全国に報じられたが、私達金融マンにとってショックだったのはその首座にＩＢＪがいたことであった。「何故あのＩＢＪが」という想いが私達を襲ったのである。

料亭女将と産業金融の雄の巨額融資はどう考えても結び付かなかった。ワリコー（ＩＢＪの発行している割引金融債）の大口購入者だから断われなかったというような説明だったが、そこには嘘があると思った。私の中では、ＩＢＪは断じて料亭に巨額融資を行う銀行ではなかったのである。そのＩＢＪが出鱈目に近い巨額融資を行っていた。この事実は、一般に想像される以上に金融界に深刻な影響を与えた（と思う）。

私は折から明確となってきたバブル崩壊の現実等から、①ＩＢＪがメインとしていた重厚長大型基幹産業の資金需要が停滞してきた、②一般大企業も間接金融から直接金融に軸足を移している、③その結果、長信銀の融資先が減少し新たな貸出先を確保する必要に迫られてきた、④その流れで料亭もＩＢＪの融資対象となった、と考え辻褄を合わせた。

しかしこの辻褄には根拠があった。後で判ったことであるが、ＩＢＪだけでなく、長銀も日債銀も、いくらでも資金需要が造り出せるノンバンクや不動産融資に驚くほど傾斜していたのである。そのツケはやがて相対的に力の弱かった長銀・日債銀の破綻という形でやってきたが、ＩＢＪも基本的には同じ行動をとっていたのである。

私はその時未だ判らなかった。既にＩＢＪや長銀・日債銀を必要としていない時代に突入していたのである。巨額の資金を必要とする我が国の基幹産業に潤沢な資金を提供するのがＩＢＪの使命だったが、経済構造が大きく変化する中でＩＢＪの果たすべき使命は徐々に縮小していた。しかし一旦出来あがった組織はその存続と発展を目指して行動する。ＩＢＪはそう行動して傷付いた。

ＩＢＪ消ゆ。１０年遅れのこの風景は、しかし日本の金融が未だ迷路から抜け出せないでさ迷っていると思わせるものがある。あの誇り高きＩＢＪ行員は今何処で何を思っているであろうか。

《複製・転載等はご連絡下さい》
TEL. 0438−53−6092 FAX. 0438−53−6096
URL: http://www.hi-ho.ne.jp/smc_toyo/　Email：smc_toyo@hi-ho.ne.jp